

「写真de俳句」は写真を兼題としております。「おウチde俳句くらぶ」という観点において、写真を発想の踏み切り板として使うことは大変有効です。写真を糸口として、これまでの人生の様々な記憶を引き出すことができるからです。

写真を兼題とする場合、次のような切り口が考えられます。

- A 写真を見ていない人の脳内に、写真と全く同じ光景を再生させる。
- B 切り取られた写真の外を想像する。
 - どんな光景がひろがってくるのか。どんな人がいるのか。どんなモノがあるのか。
- C 写真の光景の時間軸を動かしてみる。
 - 夜になればどうなるか。朝になればどうなるか、等
- D 自分が写真の中にいたら、どんな行動をとるだろう。

初めて写真で俳句を作るみなさんは、次の方法から始めてください。

- 1 写真の中にある言葉や連想した言葉を、できるだけ沢山書きとめる。
- 2 採取した単語を、季語と季語ではないものにグループ分けする。
- 3 季語ではないグループの単語を一つ選んで、十二音の【俳句のタネ】を作る。

○○○○○ + 季語とは関係のない十二音 【俳句のタネ】

季語とは関係のない十二音 【俳句のタネ】 + ○○○○○

- 4 【俳句のタネ】に似合った【五音の季語】を探す。

《季語の選び方のコツ》

- ・ 楽しそうな【俳句のタネ】ならば、楽しそうな【五音の季語】を取り合わせる。
- ・ 悲しそうな【俳句のタネ】ならば、悲しそうな【五音の季語】を取り合わせる。

俳句は実践によって学ぶものですから、理屈を読み囁るばかりでは前に進めません。まずは一句。最初の一步を踏み出しましょう。

夏井いつき

ベンチと鳶



飼育小屋まで朝霧をさ迷えり

ふるてい

6 ページで解説した発想方法を例にとると、
B↓C↓Dの方向で想像を広げています。

このベンチの周りには何があるのだろうか。「飼育小屋」があるかもしれない。この写真が未明の頃であれば「朝霧」に包まれるのではないか。そこにいる自分は「飼育小屋」に行くのにも方向を失ってしまうのではないか……という具合に、脳内からリアルな体験を引き出しているのです。

「飼育小屋」で飼われているのは、小鳥でしょうか、兎でしょうか。庭のどのあたりに「飼育小屋」があるかは知っているのに、今朝の「朝霧」は殊に深いのです。「霧」に包まれると、いつもの風景が全く違ったものに見えます。異界を「さ迷」つ

ているかのような不思議な感覚に囚われるのです。

やりようによつては、「くまでくを」という叙述は散文的になりますし、下五「さ迷えり」も大げさな表現に感じられるのですが、それらの言葉が微妙なバランスを取りつつ、季語「朝霧」の深さ、手触り、作者の心理などを伝えます。作者自身の「朝霧」の体験がリアリティをもった表現として結球しているのです。

「朝霧」が晴れた庭には、写真のベンチがいつものようにあり、「飼育小屋」も日常通りの明るさに包まれます。「朝霧」のあの時間はまるで虚構の世界であつたかのように、作者の心に静かにたたまれていくのでしょうか。

● 季語——朝霧あさぎり「秋・天文」

ベンチと蔦



役名は「ベンチの人」や蔦紅葉

ひでやん

兼題写真の中にある単語を書き出せば、「ベンチ」の一語は、皆さんの句帳にも書き留められているはずですが、この句の工夫の一つは、「ベンチの人」が「役名」であるという発想。台本に自分の名を見つけたものの、「ベンチの人」とあるのみ。名前すらない役なのです。中七「や」の強調は落胆でしょうか、皮肉でしょうか。そこにこの句の面白味があるのです。そして「蔦紅葉」は、まさに写真の中に見つけた季語。初心者の方にとっては、お手本のよきな作品です。

●季語——蔦紅葉つたもみじ「秋・植物」

蟪蛄や月曜につき働くか

月青草青

あのベンチに自分が座っていたら……と考えたのでしよう。ベンチの一角に「蟪蛄」がいるかもと想像したのか。はたまた、ベンチに腰掛けている自分のつぶやきとして「月曜につき働くか」という台詞が浮かび、後から季語「蟪蛄」を取り合わせたのかもしれませんが。

「月曜につき働くか」というフレーズは、仕方ないな、また月曜日がきてしまったのだもの……という働く人間たちの実感。「蟪蛄」はあの大きな緑の目で、じつとこちらを睨んでいるのでしようね。

●季語——蟪蛄とうろう「秋・動物」

秋天や他にも椅子はある筈で

江藤すをん

この写真を見ていて、具体的な体験を思い出したのでしよう。「他にも椅子はある筈」なのに、この見知らぬ人はなんで私が座っているベンチにわざわざ座るのだろう。上五「秋天や」からの展開が、クスッと笑えます。

作者自身はちよつと迷惑な気持ちなのでしょうが……新しい恋の出会いが、喧嘩に発展するのか、はたまた納得できない気持ちで立ち去るか。この「椅子」に拘る理由から、さまざまなドラマが広がっていきそうです。

●季語——秋天しゅうてん「秋・天文」

留守にします用なら柿の木の家へ

河合郁

「留守にします」は、貼り付けた紙に書いた文言でしょうか。イマドキ、こんな張り紙をしていたら、泥棒に狙われてしまうのでは……と心配する人もいるかもしれませんが、良き時代の、あるいは良き地域の光景なのでしょう。

「柿の木の家へ」が、映像の言葉になっっていますね。辺りを見回すと、あきらかにあの家だと分かる大きな「柿の木」があり、たわなに柿の実がみのっているのでしょうか。「用なら柿の木の家へ」が、隣近所との付き合いの濃さも思わせませうね。

●季語——柿かき「秋・植物」

- ・会員番号順に掲載しています。
- ・添削した形で句を掲載する場合があります。
- ・投句された回で記載しています。

第 1 回

ベンチと葛



この紫蘇は不思議な花が咲くさうな ⑦ パパ
 緋に染まる蟻螂の腹第二章 あすかきようか
 紅葉且つ散りて読書の捗らず あすなるこ
 秋深む我より速く老いる猫 あすなるこ
 未枯る紡績場の高き壁 あずま陽太郎
 ベーグルは今日も完売天高し あみま
 読みかけのジョルジュ・シムノン秋の風 あみま
 バス停は葡萄眠れる倉庫前 いなだはまち
 さつきまでフォレストガンブ冬隣 いなだはまち
 雨のふる無声映画やパリの秋 ウィヤイ 未樹
 銀杏散る交差すること無き道よ うからうから
 齒科助手の顔逆さまに暮るる秋 うに子
 小鳥来る無観客なる四重奏 おぐら 徳
 旧局舎大河のごとき葛紅葉 おぐら 徳
 愛読書めくる花眼や鳥渡る おぐら 徳
 色葉散る我はニュートンにはなれぬ かねつき走流

手回しのオルガンの律栗爆ぜる 斎乃雪
 冬麗ベンチから撒く鳩の餌 坂野ひでこ
 父と座す錆びたベンチや秋夕焼 山川賢茶
 蘆紅葉まにあはぬ夢の反芻 七瀬ゆきこ
 黄落や哭いたのは人さらひ 七瀬ゆきこ
 立ち停まる為の扉や美しき栗 七瀬ゆきこ
 御朱印に並ぶ山門秋晴るる 小鞠
 裸婦像の見上ぐる小窓小鳥くる 小川都
 葛紅葉ドラマロケ地のごとベンチ 小倉あんこ
 母の弾く被爆ピアノや秋深し 小倉あんこ
 ボーヴォールに憧れしこ木の実降る 松本だりあ
 目地の列外れし蟻や昼休み 城ヶ崎由岐子
 裏門の門こり冬近し 信奈
 保護猫の小さき鳴き声草の花 森中ことり
 鴨が鳴きつばなしのベンチかな 真
 露寒のベンチさつきまでいた星 世良日守
 秋の影不意にはじまる偏頭痛 星埜徹円
 望月やベンチを家として三月 西村小市
 図書館の無人のベンチ秋の蝶 西村小市
 秋の園あかるし置き去りの軍手 西田月旦
 秋の蟻群るベンチにコーラ瓶 西田月旦
 今朝だけのルール文化の日のドロケイ 石井一草
 旅立ちのシーンへ黄落の葉 石井一草
 秋の朝どうぞの椅子を置いてみる 千の浪
 月赤し生臭き傷紙める鴟 村上 無有
 母の手を握れずにある草朧 村上 無有

秋澄むやベンチを照らすアーク灯かねつき走流
 紅葉かつ散る食品サンブルに夕日かむる坂喜奈子
 路線バス待つ手に乱歩秋日和 きなこもち
 メンソールの煙草吸ふ婆秋日和 くま鷄
 新刊のページをめくる秋気かな くま鷄
 紅葉且つ散る人はベンチに年をとる けいい〇
 秋麗のベンチに着ぐるみの頭 けいい〇
 肘掛けのカーブはR秋うらら シュロバツタ
 礼拝の果ててちろろの折る声 そうり
 秋の朝厚き扉のワイナリー そうり
 父の書斎昭和ガラスに葛の影 つづきののんき
 修道院スフレ香りぬ冬の朝 つづきののんき
 蟻螂の胎やはらかき赤煉瓦 ツユマメ
 剥げかけのベンチの隅に置く秋思 じゃん
 中庭はキャンパスのへそ小鳥来る じゃん
 葛紅葉友と落ち合ふ純喫茶 じゃん
 魚河岸の蕎麦屋の列や秋高し のど鈴
 蚯蚓鳴く煉瓦造りの庭広し のど鈴
 行く秋や部室の鍵の隠し場所 ビアニシモ
 金秋や古びたカフェの飾り窓 ビアニシモ
 うそ寒や声無き声の民となる ひでやん
 カノッサの屈辱めきて冷まじや ひでやん
 競馬紙を尻に落葉のベンチかな ふるてい
 揺り椅子の手すりの丸み菊日和 ふるてい
 ウキスキーの蒸留葛はほの紅く ベトロア
 露寒の明日は手術室日記書く みー

星月夜階下に若きバレリーナ みずな
 暮れかけて踊り子を待つ秋の苑 みずな
 初雪やベンチの錆の鈍き赤 よしざね弓
 明日からは無職枯れ木は語らない よしざね弓
 ミートパイ分ける母の手木の実落つ る・こんと
 最終で帰る。とLINE居待月 伊藤興味
 腕立て百回体育の日のベンチ 佳山
 日暮れまで秋の遍路へ置くベンチ 河合郁
 裸木の幹や皇居の石畳 海峯企鵝
 長椅子のウディアレンや柳散る 海峯企鵝
 秋の薔薇一本扉は外開き 吉野川
 秋晴の展望デッキ父を待つ 京あられ
 金曜は燃えるごみの日鵲の声 玉井令子
 夕空や長洲剛より秋思 月青草青
 建て方は大工の領分竹の春 原水仙
 ひとまずの門として捨案山子 古瀬まさあき
 白鳥座とつぷりとバス停にゐて 古瀬まさあき
 裂け目より馬鈴薯火薬庫の下段 古瀬まさあき
 秋うらら二時にちいぶたちやんち前 古都 鈴
 日曜の秋園に歌声しづか 胡麻菜
 秋の燈や天井ひくき喫茶店 黒子
 三時間待つて立ち去る葛紅葉 佐々木のほら
 木の実降る音を待ちたる午後の椅子 佐々木のほら
 赤レンガ倉庫からジャズ秋夕焼 佐藤花伎
 しばらくは秋思の人であるベンチ 佐藤儒良
 かつつぽのベンチを風や葉鷄頭 斎乃雪

爽やかにタオル万博旗のごとく 村上 無有
 手袋の片つぽ反抗期にて不在 村上 無有
 仰向けのスケボー静か虫時雨 大西どもは
 だまし絵のベンチ小鳥も我も来て 谷山みつこ
 さよなら東京秋めく窓もきらめきも 直
 さつま芋涙もろくて口下手で 直
 洋館は静か赫赫毒草 天陽ゆう
 赤答案飛行機折つて秋の空 杜まお実
 秋薔薇や心なんだかアルデンテ 藤田ゆきまち
 とんぼうの翳を弾けるベンチかな 内藤羊皐
 爽やかに振られて爽やかに帰る 風太
 月がきれいだから投了ボタン押す 背番号7
 「ベンキ塗りたて」の紙の虫の死骸 背番号7
 外套の裏地のやうなワインかな 迫久鯨
 煙草吸い終わる側には夕月夜 迫久鯨
 日曜の秋のベンチにチェロケース 飯村祐知子
 爽籐の椅子みずいゝの葉紐 飯村祐知子
 われ一人銀河の音の降るベンチ 風蘭
 みのむしや母の生家はこの辺り 文女
 吟行へ行けぬ鶏頭重そうな 文女
 廃墟なすラストベルトに秋日落つ 歩一
 小鳥来る秘密の扉開く気配 眠 睡花
 雲の峰どこでもドアは使わない 木染湧水
 それぞれの秋それぞれ深呼吸 木染湧水
 秋日和ゴドーを待っているベンチ 野本美食
 爽籐やまだ来ぬ人の席を空け 野良古

第 2 回

天空のポスト



秋天へあの時言えなかつたこと ひでやん
 秋晴や思ひはきつと届きます ひでやん
 伝わらぬ言葉の多し秋の雲 ひでやん
 パイク来て集荷時刻のオリオン座 登りびと
 冬風にのつて幾千羽の手紙 登りびと
 月光を容れて白封筒を閉づ 登りびと
 冬の浜へ階段の小さき歩幅 野良古
 恋文は潮の香冬晴のポスト きなこもち

◆大賞
寝室部門

さへづりは礫寝返りの瞼に
佐藤儒良

◆最優秀賞

リビング部門	居間に咲く牡丹のような母がいる	江戸川散歩
台所部門	もがりぶえひようはくぎいのおいかな	水野結雅
玄関部門	夕虹や我が子を比べぬと誓う	荒谷恵友美
風呂部門	老いぼれの裸身の曇る鏡かな	冬のおこじよ
トイレ部門	無月なりトイレに鍵をする独居	ふるてい

◆優秀賞

リビング部門	リモコンの位置が変わつてゐて蜜柑	山本卓登	玄関部門	ドアチェーンかけて夜長を城とする	関口徹夫
	七階は雪の行方がわかる場所	上農多慶美		なかかんかまきりあまやどりぼくのあさがお	ましまのぶと
	秋風が居間の手紙を読めという	村井康典		吹雪く日のセールスマンを入れにけり	大谷正太
	籐寝椅子教師になりたかった父	猫愛すクリーム		玄関に夫の金槌日永かな	葵そら
台所部門			風呂部門		
ブロッコリーゆであがる刹那熱唱	江口小春		湯船から白鳥座見え子が嫁ぐ	三郎	
ぶった切るキャベツの破片窓につく	豊田すばる		爪立ててもつと柚子湯にしてあげる	松田夜市	
ばばのたくめしはやはらかはるうれひ	あねご		夕顔や風呂に綺麗な声が住む	あいむ李景	
缶詰に賞味期限や鵲の賛	森田欣也		涼しさや風呂場に母の髪を切る	紗千子	
寝室部門			トイレ部門		
天ノ川二段ベッドニ集合セヨ	ワンダフルもずく		月白の便器は泉花の冷	蟻馬次朗	
まばたきで礼せし妻の毛布替え	水田千種		血便の薔薇の花めく寒の入	にゃん	
春寒や死にきれぬほど散らかりぬ	こま		風邪の夜や雲踏むやうに行くトイレ	小野更紗	
寝たきりの命の匂い梅雨明けぬ	あや		花びらの触れて勝手に開く便器	大塚迷路	